「唐辛の粉にしなはれ隨分エグイ嘘が出ると云ふたんで唐辛の粉を買ふて來た」

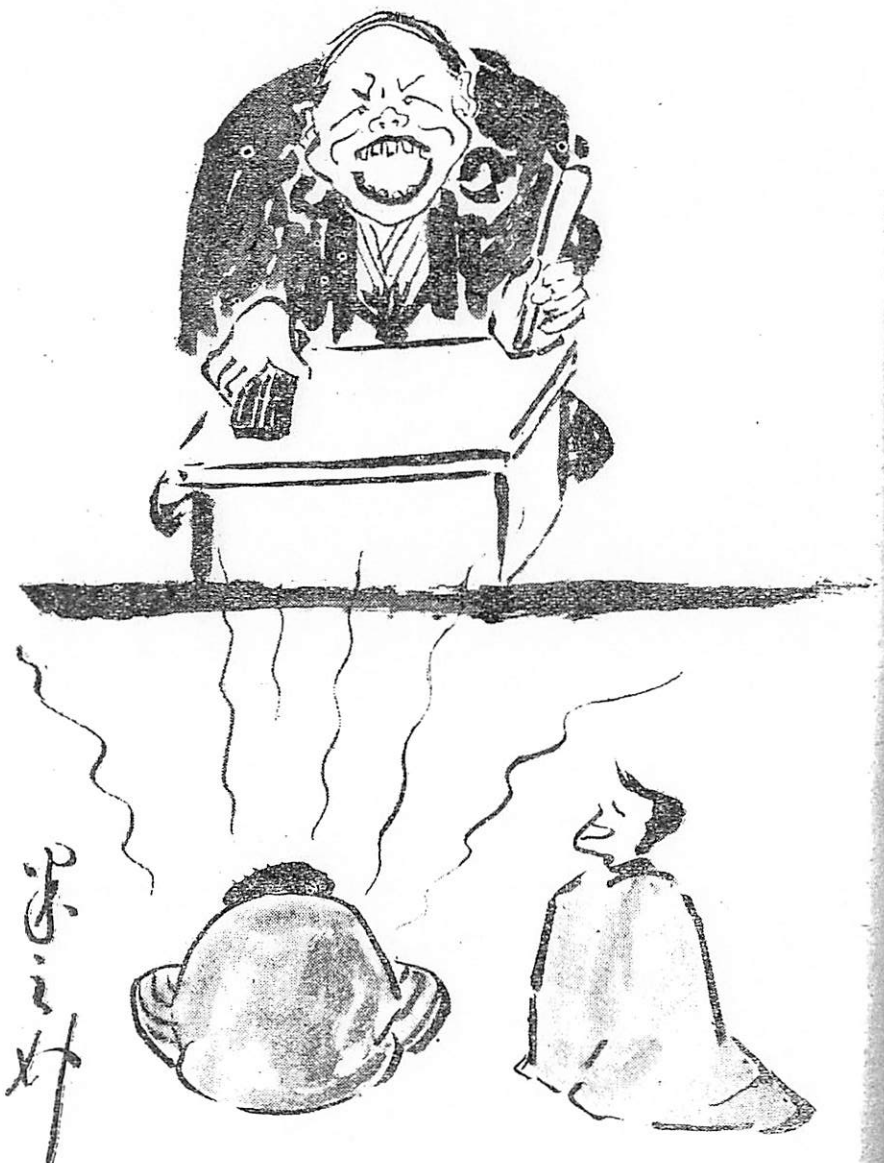
「私は唐辛でやつた事は無いが効けば結構や、講釋はナ何處の柱は何處の旦那、何處の壁は何處の御隱居と場所が極つてるね、早う行て前へ行かんと何もなれへん、さあ早う出とおいで」

怒られながら辻を曲りますと講釋小屋、何となう陰氣な、木戸には髭だらけの親爺が鐵火火鉢を抱へて額で向うを視めて雨を呼ぶ蛙みたいに小さな聲で、

「おはいり、おはいり」

お客さんを呼んで居ります。講釋場いらぬ親爺の捨て場所とか申しまして、宜い事が云ふてございます。餘り若い衆が行て居りません。たまに若い方が行てると病人で、年寄り計りで宅に居ると若夫婦の邪魔になりますので日が暮れると追出されますので仕方なしに講釋小屋へ參ります。來ると豪そうに、なア河内屋さんお早うから見得てますな、これは泉屋さん貴方も早うからお越しで夜前の處をお聞きになりましたか、ハイ大阪方の軍師眞田幸村とも有ろう者が彼の様な計略を、やなんて眞田幸村の計略の不足を云ふてる、自分は嫁の計略でほり出されてる事を知らずに。

「オイ喜いやん早うおいで、二人やで」

「有難とうさんで」

「それみてみ、お前等來るのが遲いので、モウ皆來てはる、木村はんに後藤はんに福島はんに薄田は